

青森県立郷土館整備検討会議（第4回）

日時：令和7年9月19日（金）

14：00～16：00

場所：青森県庁南棟5階 教育委員会室

（出席者）

葉山 茂委員（議長代理）、半田 昌之委員、山田 泰子委員
川守田 礼子委員、高坂 幹委員、西川 智香子委員、佐々木 遊委員、
小山田 文泰委員、竹中 恵理委員

1 開会

2 これまでの検討内容の整理（中間まとめ）について

（1）県説明

県から、資料2（1～19ページ）により説明した。

（2）意見交換（→：県回答部分）

Ⅱ. これからの時代に求められる県立博物館について

1. 新たな県立博物館のコンセプト（資料2 3～4ページ）

- 報告書に向けて補強していく部分として、めざす姿の「未来をつくる」については「創造」の「クリエイト、創る」という意味を込めたものとして考えてほしい。また、「宝物を守り、特色や価値、魅力を未来へ伝える」に関しては、利用する県民や県外から来る方に、博物館という場で何を理解してもらえればいいのかを、地域という横軸に歴史という縦軸を組み合わせながら、立体化していくイメージで検討するとよい。

博物館の展示は、あるコンセプトのもとに収集された資料で構成され、その資料は、人々が営んできた文化全体の中から切り取ってきたパーツである。そのパーツを並べるだけでは何も理解できないので、パーツがどのような時代に、どのような地域でどのような人々によって生み出されてきたのか、立体的にしていくことで、そこに展示する意味をもたらすものである。

4ページの「静」と「動」の対比について、「見る・知る・学ぶ」が「静」として位置づけられている一方で、「体感する・活動する・発信する」が「動」として表されているが、「知る・学ぶ」も動的なアクションだと思うので、これを展示の中でどのように位置づけるか、もう一度検討してほしい。

この「見る・知る・学ぶ」、「体感する・活動する・発信する」、「守る・伝える」が上下に並んでいるが、相互に関連しながら、3つをつなぐものとして、その中央に人がいるような形の図の方が思いが伝わりやすい

と思う。上下に並べると上下関係があるのかや、どれが重要度が高いのかといった見方となるため、それぞれが関わり合いながら、「守る・伝える」が充実することによって、「見る・知る・学ぶ」も充実していくなど、相互に関連し合っているというイメージの図にした方がわかりやすい。

- 新たな県立博物館と言っている割には、どこが新しいのか疑問である。

「ふるさとの自然・歴史・考古・民俗」と、博物館の分野を並べているが、5ページ以降の展示になると、この分野にとらわれない総合、分断的な展示を目指している。このため、ここでは分野ではなく、展示につながる言葉に置き換えた方がよいと思う。

また、「静」と「動」と「守る・伝える」についても、ひとつひとつが分断されたように見えるので、視点を整理する必要がある。

この3つのコンセプトを進めることによって何を期待するのか、例えば「静」を分かりやすく提供することによって何を伝えたいのかがわかるような文言が入った方がよいと思う。

- このコンセプトに記載の「見る・知る・学ぶ 『静』」という表現が気になる。「見る・知る・学ぶ」という活動は決して「静」ではないと思う。コンセプトを分かりやすく発信する際に、言葉やイメージ図は重要である。言葉の選び方や図の示し方によってはコンセプトが誤解されてしまう危険性もあるので、使用する言葉や図には十分な吟味が必要である。新たな県立博物館の方向性を、わかりやすく、より新鮮に伝えられる言葉を工夫してほしい。

学生に確認したところ、博物館や県立郷土館にほとんど行ったことがないとわかったため、普段利用しない層、関心のない層、特に若い世代がどう考えているか調査を実施した。

青森県の博物館がこれから新しくなるとしたら何を期待するかについて調査したところ、こうした若い世代は、公共の施設、特に博物館に体験型催事、地域密着の取り組み、癒やしの場などサードプレイスの役割を求めていることがわかった。また、県立郷土館に対して、古い、堅苦しい、今までとあまり変わってない、新鮮味がないといったマイナスイメージも強く持っているということがわかった。

これらを踏まえると、博物館は若年層のみならず全世代に向けたものとすべきであるが、新しい博物館については、まずはイメージの刷新やその提示の仕方の見直しが大きな鍵になると感じた。コンセプト等を伝える言葉のチョイスから見直してはどうか。博物館が有する基本的な役割はしっかりと踏まえながらも、攻めのアピール戦略を展開してほしいと期待している。

- 「るるぶ」という旅行雑誌名の由来は、元々は、「見る、食べる、遊ぶ」であったが、時代の変化に伴い、観光客が期待するものが変わっていて、今は、「体験する、交流する、学ぶ」に沿って雑誌が編集されているようである。

資料の3、4ページでは、これまでやってきたことは、どちらかというと静的なことが中心だと思うが、「るるぶ」の話で考えると、新しい県立博物館は、多分「静」ではないと思う。「学ぶ」に関しては、文献や展示を見て頷いているだけでなく、ビジュアルや没入感を重視して学ぶという説明であったので、それはもう「静」ではないと思う。もう時代が変わっているし、次の時代を目指すならば発想を変えてみるとよい。

また、「ふるさとをつなぎ未来をつくる」については、何と何をつなぐか、何を何につなぐのか具体的なイメージが重要である。

例えば、自然、歴史、考古、民俗というジャンルを別々に見せるのではなく、有機的に連携させて見せたいのか、過去に学びながら未来に向かっていくのか、若しくは、津軽、南部、下北の生活文化の違う地域が融合しているので、その価値をそれぞれ深掘りしてつなぐのかなどが挙げられる。

さらに「未来をつくる」は、次の世代に向けてどのようにアピールするのか。例えば滋賀県立琵琶湖博物館は、琵琶湖の環境対策により環境立県を目指すということでメッセージを出している。それでは青森県の場合は何なのか考えないといけない。例えば営々と築いてきた自然環境、雪、それをベースにしながらつくってきた暮らしや、残されている日本の原風景や生活遺産のようなものがたくさんある。ウェルビーイングの時代や環境との共生の時代だと言われている中、もともと青森県民がやってきたことが未来をつくるということを次の世代に向けて伝えたり、アピールしたり、提案したりしていく博物館を目指したらよいと感じている。

「めざす姿」を2ページの表現とするなら、「つなぐ」や「未来をつくる」は、具体的に何なのかを整理して記載し、「静」や「動」はなくてもよいと思う。

→ 県立郷土館が考える「つなぐ」は、地域と地域や人と人、人と地域を様々な施設や研究機関を含めてつなぐという役割を持ちたいと考えている。また、博物館は実物があることが強みであり、各地の博物館、資料館、美術館と連携、共催して様々な活動の中で実資料を介して人と人、それから物と物、それから地域と地域というようにつないでいる。何かを介してでないと人と人がつながりにくい部分もあるので、それが私たち学芸員であり、展示資料であり、収蔵資料であるので、それらを介してのつなぐということを考えていきたい、目指していきたいということで、提案した。

○ 「静」と「動」について、文字だけではなくて、図式的に表現してみてもよいと思う。

○ 「静」と「動」という2つの対立的な表現が、かえって博物館の活動を単純化し過ぎているのではないかと懸念している。

また、「めざす姿」の「ふるさとをつなぎ未来をつくるミュージアム」は、他の都道府県にもこの言葉は当てはまると思うので、例えば厳しい自然環境の中で育まれた文化、雪との共生、祭りなどの、青森らしさをこの「めざす姿」でもっと強く打ち出す必要があると思う

さらに、ふるさとはいが、青森県から世界に発信することも大事だ
と思うので、ふるさとからもっと大きな視点で語ることも大切だと感じる。

- 県民に何度も来てもらえる博物館を目指すならば、こどもがまた行きた
いと思ってくれるような県立郷土館とするとよいと思う。

そのためには、博物館での学びが、見て、触れて、聞いて、匂いをかい
で、例えばリンゴであれば味わうといった五感に働きかける体感型の学び
が、こどもたちを引きつけると考えられるため、「静」ではなく、どれだ
け「動」にしていけるかというところが斬新さにもつながっていくと思っ
ている。

- 「めざす姿」について、どのような話し合いを経て検討されたのか改めて
伺いたい。

→ 郷土館の学芸員を中心に検討し、提案したものになる。

- 県立郷土館の運営に携わっている職員の意見が大事だと思っているが、
この「めざす姿」は、様々な意味にも取れて、逆にぼやけてしまっている
ので、いろいろなつなぐという意味が込められていることを分かりやすく
表現した方がよいと思う。

また、高校生、大学生のワークショップの結果を見ていると、体験や地
域との交流など比較的アクティブな意見も出てきており、若い方たちが求
めているものと、「めざす姿」とのギャップもあると感じるので、この意
見をどのように反映していくのか考えた方がよい。

今は「静」と「動」を、動きという見方から分けたと思うが、アクティ
ブラーニングが進められている中で学びを「静」と表現することに疑問が
あるため、別の視点で分類して、「守る・伝える」を含めた3つをまとめ
る方法も検討してはどうか。

→ ワークショップでの意見は、各委員の意見を述べる際の参考として使
っていただきたい。

また、当館の利用が多いのが出前授業などの機会がある小学生や時間
に余裕のできた50代以上の方々と、利用が少ない若い世代をターゲッ
トに意見を聞いてみたところ。今後、展示の計画を作っていく段階で、
できることは反映していきたいと思っている。

「静」と「動」については、今の県立郷土館のイメージとして「難し
過ぎる」や「静か過ぎる」との意見もあったように、若い方が足を運び
にくいところもあると思い、どうしても「静かなところ」とのイメージが
強いことから、特に若い世代に来てほしいというメッセージを込めて、
体感活動を少し強く打ち出しているところはある。

2. 新たな県立博物館の役割 ア. 展示（資料2 5～13ページ）

- 第3回会議において、実物の化石と、その化石を再現した際のイメージ
を示されたことから、実物としての化石の重要さの価値も伝えながら、
それだけでは伝えられない、再現すればこういう生き物だったことを知っ

てもらいたいという県立郷土館が目指している方向は、資料の中に良く表れてきている。

青森県の地域の特性を考古、歴史、民俗、自然史という分野を取り払うところから、展示も考え、博物館の未来も考えていくといったメッセージは、説得力があると思う。従来の分野ごとの展示ではなく、青森の自然が生み出してきた暮らしや、人々が時代ごとに生き方を変えながら、青森県という特色のある地域が出来上がってきた歴史を再現したいという気持ちが伝わってきたので、コンセプトにも、文言として加えてみるとよいと思う。

- 5ページの「ダイナミックな展示」という表現について、スクリーンなどを使って迫力のある様々なイメージの動画を流したりするということなのかと考えていたが、考え方について伺いたい。

→ ライブ感、没入感を体感できるよう、映像も含めて、インパクトがあるダイナミックな展示としていきたいと考えている。

- 画面を使っただけの展示はどこでも取り入れている手法であり体感できるという点で効果的であるため、あった方がよいと思うが、インパクトがあることをもっと押し出した文言や表現の方が納得できると感じた。

→ 実物も博物館の強みなので、うまく映像と組み合わせてわかりやすくやっていければよいと思う。

例えばカイギュウであれば頭から尻尾まで発見されているわけではなくて、ごく一部が発見されて県立郷土館で所蔵しており、その実物のみを見せてキャプションをつけるのではなく、デジタルも活用し、例えばそこから想像された生物を実物大で見せていくことなどを考えている。

博物館によっては、恐竜や象を実物大で見せているところは結構あるが、県立郷土館で持っているものが大きくない実物のごく一部であるため、そこから想像できる生物などを併せて展示できる展示室を設けられたらよいと思っている。デジタルの活用方法も様々あると思うが、大きな形で見せ、こどもから大人まで大きさを体験できる展示として考え、このような表現とした。

- ただ今の説明を聞いて、期待感が高まるため、それが分かるような文章とするとよいと思う。

- ダイナミックな展示について、石川県では祭礼体験シアターや岐阜県では大型骨格など、他県の博物館では目玉となる展示が中央に置かれている印象があるが、目玉となるもののイメージはあるか。

→ 1つに絞り切れなかったが、13ページにある、メインとしての展示で、青森県の非常にはっきりとした豊かな自然の部分の四季を中心として、世界や日本で認められた祭りや遺産を季節ごとに紹介できるような展示を考えていきたい。

- 360度シアターと展示を組み合わせたものか。

→ 今後検討していくが、ただ映像を見るのではなく、来館者が参加でき

る動きのある展示にしたい。併せて、やはりねぶたでも何であってもリアルを見せたい。本物を見せながらデジタルを活用していきたいと考える。

- 第1回会議で現状の展示の課題として、特に大型の展示の入替えがしにくいことが挙げられた一方で、他県の博物館では、ボックス型で展示替えがしやすいようなつくりになっているという事例紹介があった。何度も足を運んでもらうことが狙いだとなると、現状の課題を踏まえ展示替えをしやすいとするというのが新しい博物館の大きな特徴の一つになってくると感じた。

→ 現在の県立郷土館では、一部展示替えもしているが、家具や設備が固定で整備された建物の条件から小規模な展示替えのみになるため、開館当時から変わっていない部分も多々ある。

一年の間に何回も足を運んでもらうには、例えば、春夏秋冬で展示替えをして最低4回は足を運んでもらえるような、来館する度に新鮮なものを見ていただける展示ができればよいと考えているので、あまり家具を固定しない建物が望ましいとも考えている。

2. 新たな県立博物館の役割 イ. 教育普及、ウ. 収集・保存、エ. 調査・研究（資料2 14～17ページ）

- 教育普及について、博物館は箱物ではなく、機能として考えていくべきであり、開かれたものとしていくことが大事である。県立郷土館では、出前授業や講座など、学芸員が地域のこどもたちと触れ合いながら学びを提供していることは、開かれたものとしていく活動の一つだと思う。現在県立郷土館は休館中であり、箱としての施設は閉じているが、博物館としては機能していることを自ら証明していると思う。

このような活動がこれから発展的に定着していくことで、県民も学芸員とのコミュニケーションの中で、県立郷土館は様々なことを教えてくれて、自分たちも学ぶことができる大事なところだと思ってくれるこどもや若者が増えることにより、県民が県立郷土館に共感を持って役割を認識してくれることにつながると思うので、高く評価をしている。

そして、この活動をもっと博物館を開かれたものとしていくというキーワードのもとに展開していくことによって必然的に展示も充実し、調査・研究にも力が入っていくと期待している。

- 博物館は、基本的には社会に奉仕することがミッションであり、調査・研究は学芸員が利用者の調査・研究を手助けすることが本来的な機能である。今まで学芸員が主役だと思われていた調査・研究を、利用者が主役になることができるようにすることで、敷居が下がり、こどもから大人まで、ハンディキャップを持っている方なども含めて全ての方に楽しんでもらえる博物館になると新しさを感じるし、分野を超えてストーリーを考え、それによって青森県を丸裸にする、丸裸にするのは主役のあなたですという

方が新しさを感じる。

- 県民主体の博物館の機能について、車の両輪として、学芸員によるコレクションの保存・管理や、調査・研究へのアドバイスが大事になる。

学芸員の指導の下、利用者と一緒にコレクションを活用し、博物館で利用者がどのような活動ができるのかを考える共有の場をつくろうとすると、基本的に高い専門性が求められるので、人材育成も含めて、みんなで一緒に取り組むことで、両方のレベルが上がっていき、車の両輪として機能できる博物館になれるのではないかな。

- 地元新聞紙に掲載されている県立郷土館の連載を県民として楽しんで拝読しているが、これも教育普及活動の一端だと思う。そこで教育普及について、1点質問がある。会議資料にある教育普及の活動は、今までの取組とどこが違うのか伺いたい。これまで取り組んできた出前授業やワークショップの実績を踏まえた上での改善点や新しい計画があるのか伺いたい。あるのであれば、改善した点、新たに導入した点を明確に記載したほうがよい。

→ 出前授業や移動博物館について、これまでは利用者の要望を受けて行っていたが、こちらから企画を持ちかけて実施する、特別出前授業や特別移動博物館に取り組み始めているところである。

それも地域を考えて、県立郷土館になかなか来れない、青森市から遠い地域での県立郷土館の資料の紹介やワークショップに取り組んでいる。

特別出前授業は出前授業のメニュー外で、例えばカイギユウが発見された深浦町では、県立郷土館からカイギユウの化石と実物大の絵を使った授業の企画を持ちかけて、修道小学校で実施したもの。また、この会場にもポスターを掲示しているが、「佐井でドキドキ」については、佐井村が持っている資料と県立郷土館の資料等を合わせて佐井村で展示する企画を県立郷土館から持ちかけ、ぜひ来てほしいと佐井村からも快諾を得て実施するもの。人口の少ない、こどもが少ない地域であっても我々はいきますという姿勢で取り組んでおり、このような活動を拡充していきたいと思っている。

- 資料2、3ページのコンセプト中のキーワード「つなぐ」に、県立郷土館担当者の説明にあった出前授業などの実績や人と人、人と物をつなぐという県立博物館の役割が生かされていると思うので、その連関をきちんと文言として記載したほうがよい。

また、資料2、13ページの「世界・日本で認められた」という表現が少々気になった。青森県人は外部から認められたものに価値を見出す傾向があるが、「認められた価値」に加えて、県立博物館が「つなぐ」ことで生まれた「新たな価値」や「これから生まれつつある価値」もぜひ加えていただきたい。県立郷土館担当者の説明から、現在までの教育普及活動の

中で「新たな価値」が生まれているように思ったので、それも新たな県立博物館の大きなアピールポイントとオリジナリティになると感じた。

- 調査・研究について、県民が主体の博物館とする場合、その連携の仕組みを具体的にどうつくるのかが重要である。

また県民連携の研究成果の発信はどのように行うのか。従来の発信方法はやや硬い印象があるので、もっとダイナミックな方法を検討してほしいと思う。

例えば、県民、利用者と調査・研究を進めていく、深めていく、共有知をつくっていくことを推進するのであれば、県立郷土館の中に、誰でも、いつでも、自分の研究を発表し交流できるフレキシブルな空間を設置してはどうか。自由な施設空間により、博物館が県民に開かれているイメージを強く押し出すことも可能ではないか。

- 教育普及については、これまでも成果も上げており高く評価をしたいと思うが、次のフェーズを考えた際に参考になるのは、高校生や大学生のワークショップでの意見だと思う。県民協働の企画を展開することや、地域の方々が企画段階からイベントと一緒に作り上げていくことが意見としてあったため、学芸員も県民も同じ目線で一緒に取り組んでいくということを出し出すことも必要だと思う。地域の方々に企画してもらい、それを取り上げて進める方がよいし、できると思う。

→ 県立博物館の役割として地域の人材育成もどんどん進めたいと思う。

市町村立博物館や民間の博物館、博物館がない市町村教育委員会の社会教育担当など職員も少ない中、県立郷土館がお手伝いすることで、その過程で博物館や教育委員会の方々のスキルが向上していく。まずはそのスキルを向上させていきながら地域に主体性を持たせた上で、住民の方々に参画していただくことが大事だと思っている。

- サポーターズクラブのような形で、意欲のある方を集めて一緒に活動しながら少しずつスキルアップや参画をしてもらうことも検討してほしい。県民と県立博物館が共有知や新しい知恵をつくっていくことを目指してはどうか。

- 県教育委員会では、「あおもり創造学」という地域の歴史や文化、産業を高校生がフィールドワークを通して地域の方と話をしながら深掘する学習があると思う。それを上手く博物館の調査・研究などと連動させていくと面白いと思う。高校生が歴史や文化を深掘りする機会をつくって、自分たちで調べて、学んで、そして研究成果を県立博物館で発表するなどの教育事業と県立博物館が連携した取組は非常に社会的な意義や効果もあると思う。

→ 「あおもり創造学」ではないが、今年度は、弘前南高校で、県立郷土館の職員が日本史の授業を行うこととなっている。今回は日本史の授業時間で行うが、教育課程内外いずれでも実施もできていると思う。

県立郷土館は現在休館中だが、新しい博物館では、博物館だけではなく

く、学校現場もフィールドにして取り組めたら大変よい形になると思っている。

- 調査・研究について、最近の広告やSNSは、「できました、やります、いつから募集します」ではなくて、つくり上げていく過程から見せるという手法が多いと思う。県立郷土館の研究も同様の要素を持っていると思うっており、途中で発表しながら協力者や支持者を増やしていき、来館動機につなげていくことも大事だと思う。

施設について、県立美術館のアレコホールは、普段は展示場所やくつろぐ場所となっているが、発表会や交流イベントがある際は、ステージを設置し、発表者と来館者が交流できる場所であると思う。そういった場所があると展示替えもしやすくなるため、大きなメリットがあると思う。

→ 現在であれば、調査研究の一部を新聞の連載や土曜セミナーのような場でお話すると参加者から御意見や情報を得られたり、展示を行うことでも新たな情報を得られたりしている。いろいろな機会を捉えて私たちの活動を発表できる場を考えていければよいと思っている。

- 調査・研究について、例えば学芸員が研究していることを公開して、県民に手伝いを呼びかけるといったラボのような取組も面白いと思う。
- 教育普及について、各種講座や出前授業の取組は素晴らしいと思う一方で、これから人材不足が進む中で、学芸員だけで教育の部分をカバーするのが大変になっていくと思う。加えて、人と人をつなぐというコンセプトとした際に、地域の方にも積極的に教育普及に関わっていただき、みんなで青森の伝統を受け継いでいく、教えて守っていくことを大切にするのはとても大事である。他県の博物館では市民の方が使えるスペースを広く取っていたという事例紹介もあったので、教育普及の観点から、オープンなスペースで地域の方にもワークショップなどを開催してもらえるような仕組みづくりが必要だと思う。

3. 期待する成果（資料2 18ページ）

- 今回、コンセプトについて大分議論されたので、フィードバックして修正をお願いしたい。また、他にない、今までにないようなものとは何かを考えて、細かい話ではなく大きな柱として表現した方がよい。
- 一番上に「子どもから大人まで、楽しみながら青森県の価値を理解し、誇りに思う」、下にも「県外の方もインバウンドの方も楽しめる」とあるが、文言としては、あえて大人までというよりも、「子ども」に特化するのもよいと思っている。それは、郷土愛を育む教育をこの博物館を通して展開していくというコンセプトは、1年に何度も来てほしいという説明もあったので、そのようなねらいに対しては、こどもから大人までだと曖昧さが生じてしまう印象がある。

Ⅲ. 新たな県立博物館の整備場所候補地について（資料２ １９ページ）

- 整備場所候補地の基本的な考え方や要素・条件はこれでよいが、報道等では青森市、弘前市、八戸市の誘致合戦の様相を示している。

誘致合戦の論争に終始することは本意ではないと思うため、条件となる項目等をしっかりと提示するとともに、新しい県立博物館が目指すことなどの確固としたビジョンを持って、エリアを検討していく必要がある。一方で、滋賀県立琵琶湖博物館のような位置づけが新たな県立博物館にないのであれば、地域に根差していくための考え方を整理する必要もあるかもしれない。

- 第１回会議で提示のあった整備場所候補地の基本的な考え方は妥当だと思っており、意向調査を踏まえて、要素・条件として具体的な文言が加えられたと思う。参考資料２では、立地の可能性のあるエリアが３市それぞれあることと、３市から様々な面で協力は惜しまないことについて回答があったとのことで良かったと思う。

この他、例えば滋賀県立琵琶湖博物館のように、琵琶湖の環境対策をテーマにした博物館だから琵琶湖と一体としてつくっているが、今日の議論を踏まえても、そのような具体的な象徴的な場所の提案などはなかったことから、この３つの基本的な考え方及び要素・条件でよいと思う。

県で整備場所候補地を決定する際は、この基本的な考え方や要素・条件に沿う形で、観光のデータや観光入込客数、クルーズの数など具体的な基礎データを整理し、それらを基に分析しながら検討することが大事だと思う。

- 県民が日常的に行きやすい場所や県外からの観光客が訪れやすい場所とあるが、これを優先することによって、博物館の調査・研究に支障が出ないよう注意しないといけない。確かに県民ファーストではあると思うが、調査・研究も大事なので条件に加えてもいいと思う。
- 整備場所候補地の基本的な考え方及び要素・条件の３つについては、第１回会議から提示されており異論はない。

今日の会議において、県立郷土館はこどもの未来のために在ることが大きなテーマだと思っている。現在は、学校単位での来館は小学校が多いかもしれないが、これからは小学校、中学校、高校と、各段階で活発な利用や、協働した取組の機会も増やしていくべきだと思う。

そのためには、県のどこにあれば一番行きやすいのかということも観点の一つとしてはあると思う。

３ 閉会